

## 編集後記

『親鸞教学』第一〇七号をお届けします。発行がたいへん遅れたことをお詫び申し上げます。

今回の号では、一樂真教授と山田恵文専任講師の論考に加えて、青柳英司元任期助教の論文と真城義麿先生（真宗大谷学園専務理事）の講演録が収録されています。また、例年に引き続き、金子大榮先生と安田理深先生が大谷大学でなされた講義の筆録も掲載されています。統一テーマが立てられているわけではありませんが、全ての原稿は、念仏者がいかに世を生き、いかに世に働きかけるのかという課題に言及し、様々な視点からその答えを提示しています。

「勅命に二種あり」という題のもと、一樂教授は、親鸞が『教行信証』において説示している二種回向の現実的意味について、「行巻」と「信巻」に使われている「勅命」という語をキーワードに尋ねています。その勅命には、「穢土を離れて浄土に生まれよ」という方向性のみならず、「穢土の只中で、穢土を超えよ」という方向性を促す呼びかけである

と論じておられます。後者は、還相回向という如来の用きにより、大乘仏教の中心課題である自利利他円満の成就をもたらすと述べています。還相回向や往生の意義など、近年、真宗教学の学界で話題となっている事柄について一樂教授の明確な立場表明になっています。

山田恵文専任講師の「親鸞と『西方指南抄』——勢至に関する言説を巡って——」は、『西方指南抄』において法然が親鸞の化身と讃えられている箇所と、親鸞の他の著作における勢至菩薩への言及を比較し、その意義について考察したものです。『西方指南抄』の上巻末において、法然が勢至の化身であるとする夢告が収録されている点に注目して、その言及の文脈と、『浄土和讃』末尾の「大勢至菩薩讃」、「尊号真像銘文」（広本）における「首楞嚴經」からの「大勢至菩薩御銘文」、そして『正像末和讃』における勢至への言及の文脈が類似しているということを指摘し、親鸞が晩年に著した様々な著作において「智慧の念仏」を世に広めた法然の意義を確かめ直していたと論じています。

青柳英司元助教は、「必可超証大涅槃

——正定聚之機の具体相——という題のもとで、親鸞が明らかにした真仏弟子のあり方について考察しています。「信巻」に三回、使われている「超証」という言葉に着目して、親鸞が、念仏者が必ず涅槃を超証すべき者であると論じる具体的内容を明確に示そうとしています。その考察を通して、それは、心が常に浄土に遊び、如来の大悲の光に摂取されている存在となると結論付けています。

二〇一四年一〇月一八日に、真城義麿先生をお招きし、真宗学科の一回生を対象に「学ぶこと わかること」という題で講演をしていただきました。そして今回の号にその筆録を掲載させていただきました。先生は、真宗学に取り組もうとしている一回生に対する期待と願望を述べ、彼らの学びを励ましています。特に「わかる」ところで停滞せずに、「人間に生まれた者はどう生きればいいのか」という問いに一生をかけて多方面から学び続けることの大切さを強調されています。金子大榮先生の講義録は、「正定聚の機——『教行信証』の諸問題（十五）——」と題し、信の一念釈から始まる「信巻」の後半部分についての考察です。信の一

念の意義、親鸞の本願成就文の解釈、現生十種の益について論を展開し、少ない枚数の中で豊富な内容が収められています。

「名言と自覚―願生論（十二）―」において、安田理深先生は、名号によって促される自覚について考察を加えています。「語り聞くという方法を通して、内面は内面にうなずく」と論じ、真宗の救済論の核心について種々に語っておられます。最後に「方便法身」と「法性法身」との関係について考察して、我々の救済が法身の成就、そしてそれに対する我々の自覚にあると述べています。

二〇一六年度の新入生から、真宗学科の学びは、「思想探究コース」・「現代臨床コース」・「国際コース」という三つのコースに分けられることになります。教育内容の多様化に伴い、やはり教員の研究の内容の多様化、そして研究手法の多様化も要請されることとなりますので、これは学科としての大きな転機のみならず、『親鸞教学』の転機ともなるでしょう。そこで、親鸞教学を学び、明らかにするとはどういう営みなのか、そしてそ

の学びはいかに行われるべきかということが問われます。真城先生の「絶えず学べ、広く学べ」という激励を背景に、今後、本誌では、そういった議論が活発になされることを期待しております。

（文責 コンウエイ）